

## 「一人の羊飼い、一つの群れ」(ヨハネ一〇章一一～一六節)

### 1 時代の中で

聖書には、とくに旧約聖書には、牧畜生活に由来する言葉、話しがたくさん出ています。羊飼い、あるいは羊とその群れなど、その代表的なものです。それは新約聖書にも及んでいて、今日の箇所もまさにその一つです。

イスラエル民族は、アブラハムやイサクなど父祖の時代まで遡れば、つまり今から数千年も前まで遡れば、多くが牧畜をいとなんでいたのでしょうか、現在のパレスチナに土地を得てからは、農業が基本になっていきます。種をまき、畑を耕し、収穫する。ですから神信仰を語るにしても、種を蒔く人であったり、ぶどう畑に関わることであったり、穀物の実りであったり、そうしたものが比喻として用いられることとなります。放蕩息子のたとえで神を意味する父も比較的裕福な農家の主人です。そうした中で昔からの言葉も生きつづけ、神を羊飼いとして、私どもを羊の群れとも聖書は語っています。イスラエルの人たちのノスタルジア(郷愁)だったという人もいます(ブラウン)。郷愁という言い方がいいかどうかはともかく、牧畜生活から来た言葉や話しは、イスラエルの人々には、したがってイエスの話しを聞く民衆にもよく分かったであろうと思われます。イエスはいろいろの比喻をもってご自分を語っています。今日の箇所ではそうした昔からの言い方で語っています。わたしは羊の門、わたしは良き羊飼い、イエスの言葉が私どもの耳にもひびきます。

昔、リュティ(1901-82)というスイスの説教者によるヨハネの聖書講解を読んでいまも心に残っていることがあります。リュティは今日の聖書箇所のところ「狼」という言葉に関連し、こう述べています。

狼は解き放たれ、今や徘徊している。その吠える声は、われわれの夜の眠りを妨げ、一日中、われわれにやすらぎを与えない。今やまことに狼の時代である(S.142)。

「今やまことに狼の時代である」、リュティがこう記したのは一九四二年です。第二次大戦のさ中でした。スイスは(中立国として)戦争には加わっていませんでしたが、徘徊する狼の吠える声は人びとの眠りを妨げ、いつときの安らぎも与えることをしなかったのです。

今私どもがこの箇所を読んで、「狼が来る」、「狼は羊を奪い、また追い散らす」(一二節)といった言葉に引きつけられる、リアリティを感じるという人は、おそらくあまりいないだろうと思います。

なるほど今、われわれの時代、そうした狼の時代ではないのかも知れない。またそれ私どもは喜ばなければならないのかも知れません。

先週天皇が退位し、代替わりがなされました。退位した天皇が、平成三〇年が戦争のなかつた時代として終わろうとしていることに安堵していると述べたことは、まだ私どもの耳に新しいことです。いわれてみれば、こと日本一国に限っていえば、厳密にいえばどう

か分かりませんが、戦争がなかった、そうかも知れません。そして私どもそれはそれでよかったです。と思っています。

しかし昨今の政治状況を見ると、それだけで喜んでいられる状況でないことも、明らかです。この三十年、戦争はなかったとしても、東西冷戦が終わり、さらに湾岸戦争が勃発した頃から、軍備の増強が進められ、近年加速しているといわざるをえないからです。もしそうであるなら、それは戦後の、平和を希求する国民の志から逸脱しつつあった時代といわざるをえないと思います。

その上で思うことは、憲法の基礎でもある平和があつて、また良心の自由ないし信教の自由、それを保証する政教分離、これらがあつて、教会も、ここまで歩むことができたということです。それは壊されてはならない。狼の時代が再び来るようなことがあつてはならないのです。平和がしっかり守られていくように教会は見張りの役を果たさなければなりません。戦前その罪と怠慢のゆえに果たすことのできなかつた預言者的な見張りの役です。それは上に立つ権威のためにたえず祈ることでもあります。今のこの時、こうしたことを改めて思わされる次第です。

アメリカの神学者ラインホルド・ニーバー(1892-1971)の有名な祈りを思い起こします。「神よ、変えることのできないものを心静かに受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えて下さい」。受容する平静さ、変化への勇氣、そして判別の賢さ、これらを私どもも祈り求めたいのです。

## 2 わたしは良い羊飼いです

さて今私どもは、「まことに狼の時代」といわなければならぬ時代でないことを感謝したいと思います。リュティイの時代とは違って、目に見えて、狼の時代というようなことはもちろんありません。狼が狼の姿をして現れている、現れてくる時代ではありません。

しかし狼は、私どもを、目に見えない姿で襲い、私どもも、私どもを襲う内面的な試練のゆえに、また弱さのゆえに、倒れてしまわないともかぎらないのです。それゆえ私どもはいつの時も、たとえ狼の時代でも、そう見えない時代でも、「わたしは良い羊飼いです」とのイエスの声を聞き分けたいのです。

わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げ。・・・彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである(一一〜一三節)。

この「雇い人」というのは、前後関係から見ると、当時みずから民の指導者を任じていた「ファリサイ派の人々」(六節)です。彼らと違い、「良い羊飼いは」羊のことを心にかけて」と言われます。

今日の箇所少し前、一〇章三節に、羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す、という

くだりがあります。想像しにくいことですが、この当時の羊飼いは、羊に名前をつけていたというのを聞いたことがあります。もしそうならこの良き羊飼いかも私もその名前で知っているのです。

有名な百匹の羊と迷い出た一匹の羊の話があります（ルカ一五章他）。この羊飼いは点呼の結果一匹いないと分かったのではなくて、群れを見た瞬間、あれがいないと分かった。そして九九匹を野原においたままにして、つまり彼らを狼の危険にさらしても、一匹を探し求めました。見つかるまで探し求めました。それゆえこの羊飼いは自らの命も危険にさらして捜したのです。それが「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」ということの意味です。それはまたイエスの十字架と結びつくものであることは、いうまでもないことです。

「わたしは良い羊飼いである」ということで、イエスは、もう一つのことを語っています。

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っており、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる（一四〜一五節）。

イエスは今日の箇所でも二回「わたしは良い羊飼いである」といっています。ここは二度目です。最初のときは、良い羊飼いであるわたしは、羊のことを心にかけている、命がけで守る、といっていました。この二度目では、それをもっと推し進めて良い羊飼いであるわたしは自分の羊を知っているといっています。

知遇という言葉があります。知遇を得る、自分がちゃんと認められた上で遇されるということなのです。神が私どもを知っているというのは、そういう知り方ではないかと思えます。上から目線で知っているというのではありません。この同じヨハネによる福音書には、「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。・・・友と呼ぶ」（一五・一五）とあります（出エジプト三三・一一参照）。そのようにして私どもを知っておられる、知っていて下さる方、それが良い羊飼いかイエスです。

私どもはだれもがあるがままのすがたにおいてイエス・キリストに知られています。知られるということは、ふつうなら、愉快なことではありません。しかしそれが神の前であるなら、イエス・キリストによって知られるということなら、むしろそれは私どもに解放感をもたらしてくれるものではないでしょうか。何も隠しだてする必要はない。裸で生きることができる。いちじくの葉で身を隠す必要はない。私どもは、神にすべてを知られることによってはじめて本当の自分に向き合うことができるのです。礼拝というのも、そういう機会です。神に向き合うことによって、神の言葉に向き合うことによつて、自分に向き合う、自分を知る、それが礼拝です。イエス・キリストは私どもを知っていて下さいます。キリストの眼差しの中で、私どもは自分を見つめなおします。自分を罪人として知ります。そしてまさにその自分が大いなるゆるしの中におかれているのを見いだすのです。イエス・キリストを救い主として知るのである。私どもが神のものであることを知るのである。神とともに歩むよう召されている。

る者として知るので。

### 3 「一つの群れになる」

しかしイエスが知っておられる、またイエスを救い主、キリストとして、良い羊飼いと知り、羊としてその方と結ばれるのは、「この囲い」の外にもいるのです。

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる（一六節）。

この「囲い」とは、ここでイエスに従っている弟子たちのことを、さし当たり指すものでしょう。「この囲いに入っていないほかの羊」とは、ユダヤ人から見て外国人、異邦人を指します。

じつさいキリスト教の歴史、教会の歴史は、このイエスの言葉が実現していった歴史でした。使徒パウロらの宣教によって福音はイスラエルを超えて世界に広がっていった。一つの教会、群れとなっていたのです。

昔から、教会の外に救いはない、という言い回しがあります。古い言葉で、とくにカトリック教会でいわれることの多い言い方です（二世紀、キプリアヌス）。いまもそういう言い方をするか、分かりませんが、この箇所を見ると、そういうのは正しくないといわなければならぬように思います。

むしろ、教会の外に救いはない、のではなくて、イエス・キリストの外に救いはないのです。このキリストが、私どもの手の届かないところで、私どもの知らない方法で働き、心にかけて、導いておられる。そして教会の外にいる人もまたこのイエス・キリストの声を聞き分け、従う。やがて彼らもイエス・キリストの「一つの群れ」となっていくのです。

そのように私どもが考えてもそれは教会の栄光を減らすことにはなりませんし、教会が宣教しなくていい、伝道しなくていいということにもなりません。そうではなくて教会の外でイエスが働いておられるということを私どもが考えた上で、なお私どものすることがあるとすれば、私どもはますますもって教会の主イエス・キリストを世界の主として証しすることですし、また神がそうでありたもうように、イエスがそうでありたもうように、教会も世のためにあることです。

そして私どもは、そのような「この囲いに入っていないほかの羊」が、イエス・キリストの声を聞き分け、応答し、やがて彼らも自らの声を持って感謝と賛美をささげるようになるために、彼らに先んじて礼拝をささげ、宣教のつとめを果たすものでなければならぬのです。

こうして一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。「なる」です。これは出来事を意味しています。将来の約束における教会です。この望みに立って私ども共に歩んでまいりましょう。